

埼玉県学力向上研究校指定事業
埼玉県算数数学教育研究会委嘱
小鹿野町教育委員会委嘱



令和元年度 校内研修
研究紀要

研究テーマ

「学習意欲を高め、自ら学ぶ生徒の育成」
～ 学び合いのできる学級づくり ～



小鹿野町立小鹿野中学校

〒 368-0105 埼玉県秩父郡小鹿野町小鹿野 1 4 6
TEL : 0494-75-0009 FAX : 0494-75-3650
<http://www.ogano.ed.jp/shikachu/>
E-mail:shikachu@ogano.ed.jp

あいさつ

学校長 吉岡 章

本校は昨年度、埼玉県教育委員会からの学力向上研究校の指定と埼玉県算数数学教育研究会からの研究委嘱を受け、2年間にわたる実践研究に取り組んで参りました。学力向上には、何よりも生徒のやる気を高めることが重要であること、さらに学びに向かう学級集団を育成することが大切であることを全職員で再確認しました。そして、今年度も昨年度の校内研修テーマ「学習意欲を高め、自ら学ぶ生徒の育成 ～学び合いのできる学級づくり～」を替えることなく、研究内容の深化・充実に努めることにしました。

研究の推進に当たっては、まず研究組織を見直し、「授業力向上研究部」「学級づくり研究部」「学習習慣定着研究部」の三部会を編成し、数学教育研究部会を授業力向上研究部会の下部組織としました。研究のための研究ではなく、生徒の学力と職員の指導力の向上を目指した実践的な研究にすることを確認し、取組を始めました。

研究主任が中心となり、全体研修はもちろん、各部会の取組についても着実に進められました。職員が実践研究へ熱心に取り組んだ成果が生徒の姿となって表れてきていると感じています。研究の推進に尽力してくれた職員に心から感謝するとともに、本研究の推進に当たりご指導をいただきました皆様にお礼を申し上げ、あいさつといたします。

「学習意欲を高め、自ら学ぶ生徒の育成」 ～ 学び合いのできる学級づくり ～

1 研究主題設定の理由

4校統合後、生徒同士の望ましい人間関係を構築し、学び合いのできる集団づくりを意識して取り組んできた。授業の質の向上を目指した授業研究を全校で組織的に取り組んでいる。体験授業や研究授業の交流等を活発に行っていて、小・中連携への教員の意識が高い。特に、学びや育ちの連続性を意識した小・中の連携を小鹿野町の共通課題として取り組み、町全体で学力向上へと結び付けてきている。

しかし、各学力調査の結果から、まだ学習意欲が低く、非認知能力に課題が見られ、学力の向上に結びついていないことがわかる。自ら進んで学ぶ学習習慣が身に付いていない生徒も多い。また、生徒同士で学び合い、高め合う人間関係が醸成されていない面も見られる。

そこでまず、学び合いの土台となる安心感のある集団づくりをしていく。同時に、小鹿野中としての授業スタイルを確立し、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業を実践する。また、家庭学習習慣の確立を図り、小鹿野中の学習サイクルを構築することで、主体的な学習態度を身に付けることができる。さらに、各学力調査を分析し、対策を具体的・継続的に行うことにより学力向上に結びつくと考え、本研究主題を設定した。

2 具体的な方策

(1) 学び合いのできる学級づくり

- ・「学級力向上プロジェクト」の実施、演習
- ・学級経営研修の実施（「鹿中スタンダード」「学級の手引き」の活用）
- ・教室環境、掲示物のルール

(2) 主体的・対話的で深い学びの授業の実践

- ・「一人一研究授業」の実施（略案書式を用いた教員間の学び合い）
- ・授業スタイルの確立（「小鹿野ベース」に基づく授業の推進）

(3) 自ら学ぶ学習習慣の確立

- ・学習サイクルの構築（家庭学習習慣の定着、自学ノートの活用促進）
- ・各学力調査の分析、対策（復習シート等の活用）

学級づくり研究部の取組

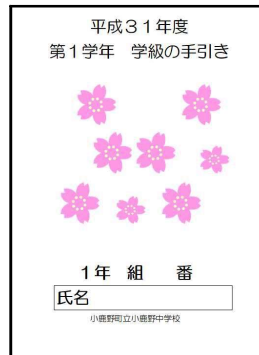
鹿中スタンダード

1 学級の手引きの活用

年度当初の各学級で行われる学級開きに「学級の手引き」を活用している。学校内での決まりや心構えと、生徒会活動や学年・学級内の組織づくり等について共有し、スムーズに学校生活がスタートできるようにしている。

2 伝統ある「黙礼」

授業の開始と終了及び式の際の挨拶として、「黙礼」を実施することで、心を落ち着かせてその後の学習や活動を行うことができている。6年間続いているこの伝統の「黙礼」は現在では本町4校の小学校でも取り組まれている。



学級力向上プロジェクト

学級力向上プロジェクトとは、生徒が学級づくりの主人公となって学級力を高めるために取り組む活動である。学級力アンケートによるリーダーチャートとアクションプランを全クラスが教室掲示し、全生徒がそれに向けて実行した。その結果、どのクラスもグラフの円が広がり、学び合いの機能する集団へと成長させることができた。



居心地の良い環境づくり

1 GOODカード

職員が生徒の善い行いをカードへ記入し、本人・家庭へ渡した。学校全体で生徒の行動を認め、賞賛することで、生徒の自己肯定感を高めることにつながった。



2 今日のイイネ!

帰りの会で一日の活動を振り返る場面をつくり、「今日活躍した人」を担当や生徒達が提案して、拍手で賞賛する活動である。最初は担任が主導して行っていたが、生徒主体の取り組みとして行えるように指導していった。

3 友達からのメッセージ

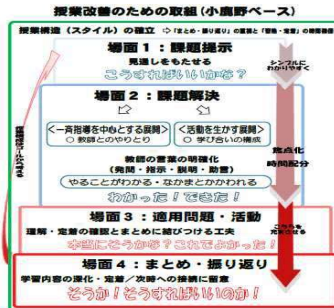
各自がクラスの友達ひとりひとりの良いところを短冊に書き、自分の良いところが書かれた「友達からのメッセージ」を台紙にまとめ、振り返る活動である。日頃の感謝の気持ちやお互いの良いところを伝え合うことで、人間関係が良好になり、よりクラスの絆を深めることがねらいである。

授業力向上研究部の取組

「主体的・対話的で深い学び」の研究

1 「小鹿野ベース」の浸透

小鹿野町では、「授業観・指導観の転換（授業の小鹿野ベース化）」を図っており、「わかる」から「楽しい」授業ではなく、「楽しい」から「わかる」授業に取り組んでいる。そして、「自分の力で学べて楽しい（主体的）」、「友達や先生と関わって楽しい（対話的）」、「成長が感じられて楽しい（深い）」授業を目指した。



2 板書カードや思考ツールの活用

板書カードを各教室に常備し利用することで、小鹿野ベースの授業展開を全教科で取り組みやすくした。また、思考ツールに関する図書を購入して回覧したり、外部指導者を招聘して思考ツールを使った授業展開を研修したりした。



3 振り返りの充実

数学教育研究部会からの提案で、全教科で活用できる『振り返り』の視点を作成した。そして、教科毎で作成した振り返りシートを使って、自身の学びを振り返ることにより学びの定着や深化を図った。

鹿中「振り返り」の視点

振り返りの考え方「目標（わらい）に対して、自分の学びはどうだったかを振り返る。」
「次の学習へつながる見直しをもつために振り返る。」

<p>A 学習内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・得がわかる「できる」ようになったが、新しくわかったこと、できたこと。 ・友達から学んだこと。 	<p>B 学習方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発見した解決方法。 ・目標（わらい）に対して、達成するために自分が考えたこと、どのように学んだのか。
<p>C 他との関連・発展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の学習につながること。 ・日常生活、社会に結びつけられること。 ・さらに学んでみたいこと、新たに習った疑問。 	<p>D 自己の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が成長した、自分の考えが変化したこと。 ・成長できたのはなぜか。 ・達成感があったか、（おもしろさ、楽しさ、満足感、もっと学びたい意欲）

一人一研究授業の取組（+要請訪問）

1 授業を見合える体制づくり

今年度も、「互いに授業を見る（見られる）」機会を設定した。全職員がA4版1枚程度の学習指導案を作成し、授業後には参観シートを使って意見交換した。また、外部指導者を毎回招聘し、授業後には授業者と指導者で研究協議も行った。



2 要請訪問

吉田教諭（技術）が、「本時で身に付けた力や変容、他との関連など、学んだことの振り返りができる授業」を目指した。ホワイトボードを活用して、少人数での話し合い活動を中心に授業を行った。指導・講評では、「回路図も思考ツールの1つである。振り返りに過去・現在・未来が書かれていると、しっかり学んでいることが分かる。課題とまとめの整合性ができていないと振り返りがしっかり書けない。」とご指導をいただいた。



学習習慣定着研究部の取組

自学ノートの取組

1 学級委員会の取組

自学ノートの取組を学級委員会の活動のひとつに位置づけ、3年生の学級委員が下級生に向けて自学ノートの活用方法を説明した。また、自学ノートに取り組みやすいように毎週「今週のテーマ」を設定した。



2 交換自学ノート

交換自学ノートを作成し、そのノートをクラス内で回覧した。他の生徒の学習方法や学習量を知る良い機会となった。良い内容のノートは新聞に掲載した。



3 表彰

自学ノートが1冊終わるたびに生活記録ノートの裏面にシールを1枚貼る取組を行った。終業式で自学ノート終了冊数の多い生徒（学年別）を表彰した。



各種調査結果の分析と対策

1 テストの分析

全国学調の自校採点を行い、生徒の苦手分野を把握した。各教科の担当が検討し、具体的な手立てを講じた。国語は「朝NIEの活用」「対策授業の実施」、数学は「問題文の読み取り」「説明場面の設定」、英語は「単語の習得」「文法の復習」に力を入れた。

2 学力向上の具体的手立て

① 春休みの宿題「春SP」

学年が変わる春休みに宿題を作成し、生徒に配付した。テスト直前に課題に取り組むことで、基礎的知識の定着を図った。

② 「コバトンのびのびシート」演習

校内研修で「コバトンのびのびシート」の活用方法を習得し、分析・活用した。

③ 常時使える教材の整備

「学力向上ワークシート」を印刷し、ファイリングすることで、教科担当だけでなく、希望する生徒がいつでも活用できるようにした。

補充学習の取組

1 夏休みの補習「サマースクール」

希望者を募り、数学・英語を中心にした補習を夏休みに実施した。短期間（3年生は5日間、1・2年生は3日間）であったが、苦手分野の克服に寄与することができた。

2 数学の個別支援

「コバトンのびのびシート」を活用し、希望者に対して個別支援を行った。プリントが1枚終わる毎にスタンプを押し、生徒に頑張った成果が目に見えるように工夫した。



研究のまとめ

成果

【生徒の変容】

- ・笑顔で賑やかに学び合う様子が、日常的に見られるようになった。
- ・生徒自身が「こんなクラスにしたい」という願いをもち、実現しようとすることによって、学び合いの土台となる学級力が向上してきた。
- ・各学力調査の点数が上がり、県と同じ伸びを示した。
- ・「小鹿野ベース」を活用することによって、授業の流れが浸透し、生徒が安心して学びに集中できるようになった。
- ・「鹿中『振り返り』の視点」を提示することにより、振り返りの質が高まった。具体的に何がわかるようになったか、また「どう学ぶか」という学びの過程を意識した振り返りができてきた。
- ・学級委員会との連携による交換自学ノートの取組により、「学習方法がわかるようになった」「自学ノートの内容が良くなった」等の意見が多く、その効果が表れ、自学の意識を高めることができた。

【指導の改善】

- ・ホワイトボードやICTを積極的に活用している。また、板書カードを利用し、「小鹿野ベース」の授業展開を全教科で行うことによって、「楽しい」から「わかる」授業への転換が図られた。
- ・思考ツールや特別支援教育の視点を取り入れることで、生徒にとって学習内容がより理解しやすくなった。
- ・「一人一研究授業」では、互いの授業を見合うことや指導をいただくことにより、力を付けることができ、貴重な学ぶ場になった。
- ・授業の始めに、どうやったら課題を解決できるか考える場面を設けることが、昨年度と比べて多くなった。
- ・学び合いの場を多く設定することによって、生徒同士の交流が活発になり、全員が達成する（わかる）授業へと変化した。
- ・学力調査問題の結果分析により、春休みの宿題やのびのびシートの活用、授業での取組など、具体的実践方法を提案し、実行することができた。

課題

- ・家庭学習の時間が短い。自学の意識をさらに高める必要がある。
- ・自学ノートに熱心に取り組む生徒もいるが、まだ少ない。やらされている気持ちを払拭し、生徒が自主的に楽しく意義を感じて取り組めるように意識付けをしていきたい。
- ・数学科で個別支援を継続的・意欲的に取り組んでいる。他の教科にも広げていきたい。

まとめ

平成30年度・令和元年度の2年間、研究主任を中心に3つの研究の柱「学び合いのできる学級づくり」「主体的・対話的で深い学びの授業の実践」「自ら学ぶ学習習慣の確立」に沿って、学力向上を目指し取り組んできた。

「学級づくり研究部」では、学び合いのできる学級づくりを目標に取り組んだ。学級力という基盤が固まることで、確かな学び合いが機能するようになった。「授業力向上研究部」では、小鹿野ベースを基にした授業改善を目標に演習を多く取り入れて研修を行った。教師一人一人が「学び合い」や「振り返り」などを体験することでやり方や価値を理解し、積極的に取り入れるなど、授業の変容が見られた。「学習習慣定着研究部」では、学習サイクルの構築（授業と自学）と読書活動の推進を目標に取り組んだ。

各研究部で有意義な取組が行われた結果、学力調査の点数が向上しただけでなく、質問紙の追跡調査から「主体的・対話的で深い学び」が定着しつつあることが伺われる。今後も、2年間で築きあげてきたことを基盤に、生徒の学力向上を目指し、楽しい授業、わかる授業づくりに学校全体で取り組んでいきたい。

最後に、ご指導いただいた指導者の皆様に感謝申し上げます。